

新生アルゼンチンの未来は

今や世界的に有名になったスイスのダボス。年に1回、厳冬のスキーリゾートに世界の政治家、経営者、知識人が「非公式」に集まり、自由闊達に議論をし、交友を深める。国際会議といっても結論も声明も出さない。

ダボスは日本でいえば小さな寒村である。テレビでおなじみの各国の首脳たちが狭い道をぶらりと歩いている。10数年前、筆者も何度か参加し、立ち話の単独インタビューに成功したことがある。その昔、地元のシュワブ博士が小規模な炉辺談義を始め、それがここまで大きくなった。

今年1月末のダボス会議に、大統領選に勝ったばかりのアルゼンチンのマクリ氏が姿をみせた。12月10日が就任日だから世界への最初の顔見せといつてよい。アルゼンチンの大統領がダボスに来たのは2003年以来13年ぶりのことである。

ダボスは各国政府にとっては便利な場所で、「非公式」という触れ込みだから「公式」には日程調整が難しい相手でも、お互い気楽に首脳会談ができる。小難しい記者発表も必要ない。

マクリ大統領はダボスで英国のキャメロン首相、カナダのトルドー首相、メキシコのペニャニエト大統領、イスラエルのネタニヤフ首相ら、多くの首脳と会談した。

また経営者ではカルロス・ゴーン日産ルノーCEO、シュミット・ゲルグ会長らと手あたり次第に会い、顔を売った。ご本人が人気サッカーチーム、ボカ・ジュニアーズの会長だから、営業は手慣れたもの。これも前政権とは様変わり理由だ。

反米左派の前フェルナンデス政

権は債務返済をめぐる先進国と対立、IMF（国際通貨基金）を公然と批判し、世界から「問題児」と警戒されていた。中道右派のマクリ大統領のダボス会議への出席は「国際社会との関係修復」のメッセージを主要国に伝えたかったのではないかと。

21世紀になってからのアルゼンチンはそれほど異質な存在だった。福^{ふく}嶋^{しま}・在アルゼンチン日本大使はフェルナンデス政権時代を「鎖国」と名付けているが、それが決してオーバーではない身勝手な国にみえた。

現在のGDP成長率は15年に0.5%、16年はマイナス成長の見通しで、外貨準備高は250億ドル程度まで落ち込んでいる。インフレ率も含め「発表数字がおかしい」とIMFから指摘されたこともあり、国際社会の信用は失墜したままだった。

マクリ大統領は就任後すぐに懸案解決に手を付けた。国際社会と普通の付き合いを再開するにはどうすべきか。答えは簡単で、フェルナンデス政権の政策をすべて否定すればよい。

彼はまず反米政策の基本を根こそぎ変えようとしている。最大のネックになっていた2001年の債務不履行（デフォルト）問題に関しては、米ファンドに46億5000万ドルを支払うことで原則合意した。デフォルト状態の解消によって、アルゼンチンは海外での債券発行などが可能になる。

また、外国からの資金流入を促進するとともに、低迷する経済の立て直しを急ぐ。前政権は保護主義を前面に押し出していたが、自由貿易促進と市場開放へ大きく舵

を切る。外貨制限で輸出入が円滑に進まない問題も各種足かせを外すことによって解消しそうだ。

なるほど、いいことづくめ、の話が期待感も込めて聞こえてくる。新政権への国民の反応は今のところ悪くない。ただ、この国と長く付き合っていると、どこか信じきれない部分がある。それは、新政権の“本気度”である。

難題のひとつは前フェルナンデス政権派が多数を握る国会運営であろう。国会の議席数は上下両院とも前フェルナンデス政権側が多数を占める。野党勢力がこれからどんな動きをするか今のところ読めない。

しかもポピュリストで知られる元ファーストレディー、「エビータ」へのオマージュはこの国では根強いものがある。20世紀初頭の「GDP世界第5位の先進国扱い」に郷愁を覚える人もいるはず。今回の大統領選挙でマクリ氏は51.3%を獲って勝利したが、対抗馬のシオリ氏（48.6%）とは僅差の戦いだった。変革を望まない人たちも意外に多いのだ。

アルゼンチンを理解するキーワードは「神風」である。軍事用語ではない。いつか神風が吹いてくるから、ゆったり構えよう、という意味である。資源も食料も何でも生産余力があるから「鎖国」をしても生きていけるというわけだ。

「持てる国アルゼンチン」の政府幹部にかつて「日本の技術はすごい」と“いたわるように”言われた覚えがある。その後の発言は「でも、それ以外は何もないよね」ということだった。その場面が忘れられない。

リオ五輪の隠れた意味

「リオ」がモテモテである。「リオ」と聞けば、誰でも8月に開催するスポーツの祭典、リオデジャネイロ五輪・パラリンピックを連想する。代表を決めるアスリートの戦いは熾烈を極め、マラソン、柔道などの代表選考ではいつもながら選ばれた人と落ちた人の悲喜劇が繰り返される。

リオ五輪代表に決まった選手は「メダルを目指してがんばる」と決意を示す。アスリートにとってリオは決戦の舞台だが、その場所がどんなところか、多少の知識があったほうが戦いも楽しいのではないか。

その1 リオは「川」の意味だが、海沿いなものになぜ川なのか。汚染が問題視されるグアナバラ湾の奥に位置するので、初めて訪れたポルトガル人が湾を川と間違え、「1月の川」というようになった。

その2 1565年に市が発足、450年が経つ。1762年に北方のサルバドルに代わって首都になった。一時期ポルトガル王室がリオに逃げてきたこともあり、この場所は王室用の住居、庭園、劇場など歴史的建造物が多い。

その3 日本の23倍の面積をもつ広大な国だが、五輪がリオで開かれるのはなぜか。1960年にブラジリアに遷都したが、リオが「ブラジルの中心都市」であることには変わりがない。国営企業の本部はおおむねここにある。精神的支柱の町といってもよい。

その4 なぜポルトガル語になったか。南米の他国にはコロンブスらのスペイン船団が到達したが、ブラジルあたりは「海だ」と思われていた。1500年にポルトガル人のカブラルが発見し、南米で

はこの国だけがポルトガル領になった。

さて五輪の受け入れ準備はどうか。競技施設の建設遅れを指摘する声もあるが、14年のサッカーW杯と同様、ブラジル人は心配していない。それがブラジル、といってしまうとそれまでだが「つじつま合わせ」の天才のような国だからそれに期待するしかない。

この国は最終的にはしっかりと開催にこぎ着けるはずだ。一部リオ市内を走る地下鉄の新路線は間に合いそうにないが、そのほかは予定通り完成させるだろう。

ブラジルにとって、最大の五輪効果は交通インフラの充実である。昔のリオ市内は車やバスの交通渋滞に悩まされてきたが、中心部に新設の路面電車(VLT)が走る予定で、セントロと呼ばれる旧市街地と港湾地区のアクセスが極めてスムーズになる。

また五輪のメイン会場になるリオ市西部の「バハ地区」には高架道路の専用バスレーン(BRT)が完成、国際空港から会場までの連絡が様変わりとなる。

リオの地形はごつごつとした岩山が点在し、それを迂回する道が多かったが、新たなトンネルが開通したことで移動しやすくなった。リオはひと昔前とは様変わりの「便利な町」になっている。

リオ五輪はブラジルにとっては経済効果が期待できる格好のイベントである。しかし、まるで申し合わせたように政治、経済の「悪材料」が噴出している。加えて、ジカ熱ウイルスの広がりもある。

WHO(世界保健機関)によると、今年は北・南米大陸で300-400万人に感染者が広がるとみら

れている。ジカ熱は妊婦が感染した場合、新生児の小頭症との因果関係が疑われている。このため、陸軍の兵士を動員して、感染媒体とされる蚊の駆除に懸命の作戦を続けている。

リオ五輪の隠れた「売り」は「おもてなし」かもしれない。日本とは違った「おもてなし」だ。歴史的に移民に優しい国民がその奥の手を出す時だろう。

ブラジル流「おもてなし」の典型例は難民への対応だ。シリア情勢の悪化で大量の難民が欧州に流入しているが、南米大陸で最もシリア難民受け入れに熱心だったのはブラジルである。2010年にハイチで大地震が起きたとき、ブラジルは4万人超の難民を受け入れ、周辺国を驚かせた。

またIOC(国際オリンピック委員会)は最近、多国籍の「難民代表団」にリオ五輪の正式な参加資格を与えた。ブラジルならではの決定だと思う。

日本の「おもてなし」は礼儀正しく、親切、丁寧な接客態度とされるが、難民受け入れでは、ブラジルのほうに分がある。人に優しいこと——それがブラジル流だ。いい加減にみえて、最後は相手を思いやる「心の奥深さ」があることは多くのブラジル駐在経験者が知っている。

そうでなければ日系人190万人(外務省は最近この数字を使っている)はブラジルに定住できなかった。ブラジル流の「おもてなし」を日本の代表選手たちが味わうことができれば、勝負とは別にリオ五輪に参加した意味が出てくる。

(日本ブラジル中央協会
常務理事 和田 昌親)